



老神父を訪ねる

長崎巡礼①

大勢の殉教者を出した長崎は、一時的とはいえキリスト教文化が栄え「聖都・ローマ」に対し「小ローマ」と呼ばれた。今も市内だけ二十二のカトリック教会があり、修道会が二十五もある。

そして、広島に続く世界で二番目の被爆地。長崎は何度訪れても歴史を感じさせる魅力的な街である。今回の巡礼記を書くにあたり、ちょうど福岡に行く用事があり、足を長崎市まで伸ばし

た。そして、イエズス会長崎二十六聖人修道院におられる老神父を訪ねた。

八十八歳のアメリカ人宣教師、クラークスン神父は昭和三十年に来日し、以来五十六年間、日本で神の愛を伝えるためにその生涯をかけてこられた。

神父が山口サビエル記念聖堂の主任神父の



日本人のように上手にはしを使われるクラークスン神父

ほほ笑み



かつてイエズス会本部だったところには長崎県庁がある

物静かで不快な表情を見たことはない。まさに慈父のような神父である。

「長崎に行きます」と、電話で連絡すると大変喜ばれ「市内巡礼に便利なホテルを調べて連絡します」と言われた。

すぐ、連絡があるだろうと思って待っていたが、なかなか私の電話番号を忘れられたのかもしれない。夜、もう一度こちらから連絡しようと思っていたら、三時間余り過ぎた夕方、電話があった。

「今、四軒のホテルに行き、パンフレットをもらって来たので送ります。高齢で車の免許証を返上したので歩いて回ってきたので

て、神の存在を信じ、他者のために自分の生涯を捧げる司祭や修道女。この人たちが「神は存在する」と言われるのであるから、きっと神はおられるに違いないと

時間がかりました」とのこと。長崎市といえば坂道の多いことで有名である。そこを歩いて四軒ものホテルを回られたという神父の優しさ。何ごとにつけても他人に対して誠意ある対応をしてくださる神父の人柄に胸が熱くなつた。ミサの説教だけでなく、神父の行動一つ一つが神を証しているように思える。

結婚もせず、家族とも離れ、日本で人々に神を証する力はどこからくるのであろうか。今回も三日間、助手席に乗って長崎市内を案内して下さった。私の信仰は妻を通じてクラークスン神父をはじめ多くの外国人宣教師に出会ったことに始まる。私利私欲を捨

私も信じる。

迷いがないと言えうそになる。しかし、外国人宣教師の生き方を目の当たりにすると、神はおられると思う。

終戦後、来日した外国人宣教師は高齢となり、すでに帰天した人も多い。今回訪れた長崎二十六聖人修道院にも八十歳を過ぎた神父がクラークスン神父をはじめ三人おられた。老いても輝きを感じられる。

老神父との出会いは今回の巡礼の最大の土産だった。

○今週の言葉

「神はわたしのうちに、わたしは神のうちに」(三位一体のエリザベット)

(元山口放送取締役ラジオ局長)